

おくることば

ももづたふ 伊藤教授は うるはしき ひびをかさねて ななそぢの 寿をむかふれば いにしは  
る きまりによりて まなびやの 職をしりぞく しりへより みちゆくわれら 古稀をほき わか  
れをしみ 小冊を あみておくと ささやけき まなびのしるし たづさへて ここにつどへり。  
伊藤氏の 学としいへば なかつよの 日本文学 なかんづく 仏教文学をさねとして、そのみち  
のおくをきはむるにとどまらず、そのほとりなるもろものふみのはやしにもあゆみいり、ひろくふ  
かくさぐりつづけて、いとせおこたるなきさま、業績目録にさながらあきらかなり。そのひととなり、  
はるかぜのごとくあたたけきまなざしもて、ともどちにしたはれ、学生のためしひをとらふ。たゆた  
ふなみのごときかたりくちは、たくまざるヒユウモアとなりて、きくものこのころをなごます。

わかきひの氏はまた、いくさにやぶれたるくにの教育と学術をふかくうれへ、その再興にあつきち  
をはげしくもやしき。やがて仏教文学会副代表、日本文学協会委員をつとめ、さまざまのことをくは  
だて書をあみて、おほきなるあしあとをしるせり。そのあゆみは年譜につまびらかなり。うちにして  
は、みそとせになんなんとするつきひ、教育・研究・運営につくし、成城大学評議員・将来計画委員

をつとめ、はては、文藝学部自己点検・自己評価委員会をひきゐる、こちたきあげつらひのもつれをときたり。

大学をしりぞきてより、講壇にたつことはすくなく、みやこのにしなる日野に閑居して読書三昧・著述三昧にすごせりといふ。そは、氏のしたしくよみきたりし鴨長明・兼好法師の境涯なり。されど、よをすつるにはあらで、いよよいのちをいたはりて、いとまをたのしみまなびをふかめ、なほきびしくわれらをみちびかれむことを、せちにねがふ。

十一月十一日

工藤力男